

はじめに

肢体不自由教育は、養護学校教育義務制実施（1979）前後から、子どもをまんなかにして、保護者・教職員が学校観・教育観を大きく転換しながら一歩ずつ創り上げてきたといえます。しかし、特別支援教育の推進のなかで、肢体不自由教育においても、数値化して客観的に「見える教育成果」が求められ、子どもを、おとなの立てた目標通りに変えることが教職員の専門性だとする風潮が強まっています。子どもの主体性・自己選択・自己決定が重要だとしながら、子どものねがいや気持ち抜きになりがちです。さらに、教職員配置や教育条件整備は後回しにして、教職員の能力・専門性が強調されています。

肢体不自由教育で大切にしてきた、子どものみかたや教育実践を考える視点を、あらためて確認していくことが必要です。

肢体不自由児は身体機能・運動機能の障害だけでなく、視覚障害や言語障害などいくつかの障害が重複していることが多く、一人ひとりの子どもの状態に対する適切な理解に基づく指導が求められます。また、食事や排泄などに対するきめ細かい配慮のほか、呼吸や体温調節などのちに直結する機能に対する理解と配慮が欠かせない子どもも少なくありません。肢体不自由教育は子どもの障害の重度重複化のなかで模索され、鍛えられ、「重症児教育」という実践分野をつくってきました。

一方、特別支援学校・特別支援学級のほか通常学級場で学んでいる肢体不自由児にとっては、教育条件の不十分さからさまざまな制約・制限が生じている場合が少なくありません。ここでも肢体不自由という状態に対する配慮を保障し、学校生活を充実させることが求められます。

しかし、そのような身体・運動面、健康面の配慮さえすれば学校教育の目的が達成されるものではありません。子ども自身が友だちといっしょにさまざまな学習経験を通して世界を広げ、自らの人生の主人公として社会のなかでゆたかに生きていく力を身につけていくことこそがめざされるべ

きです。きめ細かい配慮を土台にして、いのちと健康を守りながら、子どもの豊かな学びをつくる、これが学校と教職員の役割です。

特別支援教育体制になって肢体不自由教育の場が分散するとともに教職員の異動も頻繁になり、義務制実施から50年近くかけて学校現場で積み上げてきた授業・教育課程づくりの過程を知っている教職員が少なくなりつつあります。以前は、ひとつの特別支援学校でじっくり勤務することができましたが、近年は異動までの年数が短くなり、さらに「いろいろな障害に対応できる」能力を高めるために他の障害種の学校を経験すべきだとして異動が求められています。教職員経験年数はベテランでも、他の障害種の学校から転勤してきて肢体不自由児との出会いに戸惑う教職員も少なくありません。また、複数の障害種に対応する知肢併置校・総合支援学校などといわれる特別支援学校が増えたことにより、子どもがより近い学校に通学できるようになった反面、学校規模が大きくなり、取り組むべき教育課題が多様化しています。ひとつの障害やひとりの子どものについて、教職員がじっくりと研修し、実践研究を行うことがむずかしくなっています。

そうした中、本書は、「肢体不自由のある子どもの教育について、教員養成課程や学校現場で学び合う本があったら」という声から生まれたものです。全障研では障害の重い子どもに対する教育実践は出版されていますが、肢体不自由教育としてまとめた本はありませんでした。肢体不自由のある子どもの発達へのねがいを受け止め、子どもの心とからだ、一人ひとりの子どもと子ども集団、教職員集団の発達を結合して、実践を語り学び合っていくことの今日的意義はとて大きいと考えます。

この本が、経験の長い短いにかかわらず、肢体不自由教育の歩みと目の前の子どもたちに学びながら、それぞれの学校・現場から権利としての肢体不自由教育をすすめていくきっかけになることを願っています。

猪狩恵美子